

ベトナムの病院薬剤部門への 抗がん剤関連業務強化を目的とした 国際協力活動

国立国際医療研究センター病院薬剤部 瀬戸 恵介

【はじめに】

国立国際医療研究センター（以下、当院）では、平成27年度より、医療技術等国際展開推進事業として対象国の公衆衛生水準の向上を図りながら、日本の医療についての技術移転を目的として多数の研修事業を行っている。ベトナム社会主義共和国（以下ベトナム）では、医療の質・安全管理が喫急の課題となっており、これまで医師や看護師を対象とした研修が多数行われてきた。一方、コメディカル部門（薬剤部、放射線部、検査部）における研修の機会は少なかった。医療の質・安全管理確保を目的として、一昨年度よりチョーライ病院（ホーチミン市）、バックマイ病院（ハノイ市）の2施設に対し、医療の質・安全管理確保を目的としたコメディカル部門に対する研修事業を開始している。薬剤部においても、一昨年度より両施設から薬剤師を受け入れて研修を行い、また当院薬剤部のスタッフを派遣し、多くの情報提供や技術支援を行っている。平成28年度の研修事業においては、前年度の研修事業より課題として挙げた抗がん剤関連業務の強化を目的として研修事業を行ったので、今回その内容についてご紹介する。

【プロジェクト内容】

平成28年度に行った事業内容として、まず、当院薬剤部スタッフ2名がベトナムの両施設を訪問

し、がん化学療法に関連した薬剤師業務の現状把握、問題点抽出を行い、その後チョーライ病院、バックマイ病院の各施設より2名ずつの薬剤師に対して研修を行った。再度、当院薬剤部スタッフ2名が研修後のフォローアップとして両施設を訪れ、研修後改善した点、研修より得た知見を基に今後変更予定の点等に関する確認を行った。各施設の薬剤部スタッフに対し、プレゼンテーションを行い、問題点に関する情報共有やディスカッションを行った（図1）。また、本プロジェクトの日本での研修内容については、ベトナム側から要望について聴取を行い、抗がん剤の無菌調製、がん化学療法に関連した処方チェック、服薬指導、副作用アセスメントに加え、日本の病院薬剤師業務全般に関わる業務、TDM、電子カルテを用いた医薬品情報の活用に関する研修の希望があったことから、その内容について研修プログラムに組み込み、研修を行った。



図1 プロジェクト活動内容

【ベトナム病院の実情】

ここで簡単に、ベトナムの病院事情について紹介する。今回研修を行った、チョーライ病院、バックマイ病院は、ベトナムの診療、教育、研究の中心的な役割を担っている施設である。図2に

	チョーライ病院	バックマイ病院	NCGM
病床数(床)	1900	2259	781
入院患者(人)	2400	3000~4000	約700人
外来患者(人)	3700	3000	1900
大卒薬剤師(人)	21	25	59
テクニシャン(助手)(人)	87	155	5

図2 ベトナム両施設と当院の薬剤師数と患者数の比較

示すように、入院されている患者数は、病床数を大きく超えており、そのため、患者さんが1床に2名横になられている場合や、ストレッチャーや、床に寝ている場合もある。日本では想像できない程多くの患者さんへの対応を求められている施設である。また、看護師は、日本のように患者のケアを行わない(状況的にできない)ため、必ず入院の際も、家族が付き添っており、写真のような混雑状況となっている(身の回りの世話や食事介助などは家族が行う)。

ベトナムでは、保健診療を受けるには、郡病院のような小さな病院をまず受診し、紹介が必要な患者については大病院を紹介するシステムがあるとのことであるが、診療金額が高額になったとしても、最初から両施設のような大病院の受診を希望される患者さんが多く患者が集中してしまっているとのことであった。

【日本での研修実施】

がん関連の業務は、チョーライ病院については、抗がん剤のミキシングは行っているが、レジメン管理、処方チェック、患者への指導等は行っていない状況であったため、抗がん剤のレジメン管理、がん患者に対する指導に関しての研修を重点的に行った。また、バックマイ病院については、看護師がアイソレーターを使用し抗がん剤のミキシングを行っているが、病院幹部からは今後、薬剤師が行うよう指示を受けているという状況であったため、抗がん剤調製業務に関する研修を重点的に行い、当院の調製業務マニュアルの情報を提供した。研修プログラムは、各施設の状況が異なっていたため、各施設のニーズにあった内容を作成した。日本に來られた研修生は多くの事に関心を抱き、非常に熱心に質問をされていた。また、日本で実践されている調剤システムや医療安全対策、医薬品品質管理についても、自施設にて導入を検討していきたいとの言葉もあった。研修後に記載いただいた研修の満足度に関するアンケート結果からも、非常に満足度の高い研修であったことが伺えた。



写真① 病棟



写真② 病院受付前

【フォローアップ】

当院より2名の薬剤師が、研修後フォローアップを目的に両施設を訪問した。チョーライ病院においては、研修後の変更点として、抗がん剤調製の際に使用している調製用紙の変更、抗がん剤調製前の事前準備方法の変更、外来化学療法患者への薬剤師による患者指導の実施を院内へ提案中であることなど多くの点において業務改善に着手していることが報告された。また、バックマイ病院においては、抗がん剤調製に関する医薬品データベースの作成に着手、外来で抗がん剤治療を行っている患者に対する有害事象の調査、日本で提供した、抗がん剤使用患者への副作用情報提供用紙のベトナム語版の作成、アミカシン、バンコマイシンの使用マニュアル作成、医薬品倉庫の定期的な温度および湿度のチェック、複数規格医薬品のリスト作成と、薬品棚への注意喚起など多くの点についての業務改善への取り組みが認められた。



写真③ 外来患者さんが抗がん剤治療を受けている様子



写真④ 病院の敷地内にある外来患者さん用の調剤薬局

【最後に】

今回の研修事業より、日本の薬剤師業務、医療情報システム等の新たな知見を体験したことでベトナムの病院薬剤部における多くの問題点が抽出され、フォローアップ時にそれらが改善されていることが明らかとなった。今後もベトナムにおける医療の質と医療安全の向上を目指し活動を継続していく予定である。また、本事業の研修プログラムにおいて、国立がん研究センター中央病院の薬剤部の見学についてご承諾いただいた、薬剤部長の寺門先生、ご対応していただいた、副薬剤部長の橋本先生にこの場をお借りし深く感謝申し上げます。